

第5回コミュニティスクール検討会の概要

■概要

日時	令和6年9月3日(火) 午前10時00分～正午
場所	オンライン開催
出席者 (敬称略・50音順)	上沼 昭彦、河西 哲也、塩原 雅由、城村 義人、武田 育夫、 傳田 智子、早坂 淳、伴 美佐子、堀田 茂樹

■主な意見

- ・活動を行っていく中で、課題や地域からの要望もたくさん出てくる。取り掛かりでは課題は出るがそれをみんなで解決していくことがポイントになった。また、担任の先生方に運営委員会に参加してもらうことで担任の先生方にも必要感が生まれたと思う。互いに話し合う中で生まれたワクワク感、地域の方々とのつながりが大切。
- ・地域の本気を引っ張り出すためには必要感が必要。子どもたちの必要感と地域の必要感を重ねていくことで、子どもたちが地域からの本気のプラスのフィードバックを受けて、自己有用感を高め、「また頑張りたい」という意欲をもって、自学自習のサイクルを主体的に回し始める。すると、地域連携も自然に回り始める。そこでは、共有した必要感をもとに、あちらこちらから様々なアイデアが提案され、気がつけば「子ども及び地域とともに創るカリキュラム」が実現できるようになる。さらに、学校も地域も共に無理なく取り組めることを大切に地域連携を進めると、持続可能なシステムが構築されて、地域とともにある学校づくりの本当の良さが実感できる。
- ・コミュニティスクールをつくっていく中で、先生方は最初から100点を目指しすぎなのではないか。最初は40点かもしれない、でも、地域の方々と一緒に作っていくということは、そのプロセス、営みにコミュニティスクールの価値があるのではないか。
- ・現在、学校での学びは、教師主導の教え込みの学びから、子どもたちの内側から湧き上がってくる「知りたい」「わかりたい」「解き明かしたい」という内発的な動機に基づいた探究的な学びに切り替わっている。時代が大きく変わる中で地域と学校の関係性も義務感からの関りから面白そうやワクワクといった内発的動機付けを持った人達とつながりに変化していきたい。このつながりの中でコミュニティスクールを展開することができれば子どもたち、先生方のウェルビーイングにつながっていく。ウェルビーイングを学校の先生方に実感させるための手段として、コミュニティスクールは有効であると考えている。
- ・コミュニティスクール推進の課題は2つ。少子化への対応と学習指導要領の円滑な実施と教師の働き方改革のための指導・運営体制の構築。このような課題解決のためには、市町村教育委員会がこれからの地域の子どもを育てるために制度を活用した教育改革を実施し「地域の学校」の確立を図る必要がある。
市町村教育委員会が制度を活用した教育改革を進めたときに学校はどうすればいいか
1つ目、校長先生が学校内外に開く経営ビジョンに基づく学校づくりの実施。
2つ目、先生方の協働の輪を広げて教育活動を展開
3つ目、子どもが学校づくり・授業づくりに参画する仕組みをつくる必要がある
この3つがポイントになる。
- ・コミュニティスクールを進化させていくために必要なことは、意識化(当事者意識を持つ)、相互理解とそれを支えていく仕組み・体制づくり。必要性だとか理屈だけを確認していても地域の方の理解はなかなか進まないし、動くことが難しい。これは経験しかないと思う。子どもの姿、変容、喜んでいく姿を関わった地域の方が見れば、当然良かったとなるし、地域側の自己有用感、自己満足感が高まっていくので意識化はかなり図られると思う。

- ・行政の仕組み・学校の支援の在り方だけでなく、地域側の仕組みづくりをどうしていくか。現在はコーディネーターが行っているかと思うが、このコーディネーター的な存在を置くことや継続性の担保については、今後具体化していく必要がある。
- ・校長先生は夢を語れる人であってほしい。そして、語っていただく夢は小学生でもわかる言葉で語っていただくと、先生たちの夢を理解して下さる味方がさらに増えていくのではないか。不易と流行という言葉もある。教育は変わってはいけないものを保ちつつ、時代に合わせて変えていかなければいけないことが大きくある。だからこそ、大人は変わることを・失敗を恐れてはいけないと思う。変えていくためにみんなで力を合わせる姿、変わることを恐れない姿、そして、未来に向けてワクワクしながら大人が話をする姿を子どもたちに見せていかなければいけない。
- ・地域にはそれぞれの課題や状況がある。行政としてはいろいろな事例を紹介していくが、失敗事例を共有していくことも必要。失敗に寛容な教育社会にしていかないと、変わることを恐れずにチャレンジする人たちというのはなかなかでてこない。また、学校は地域のアイデンティティと強く関係している。地域とともに教育課程をつくっていくことは本当に大事。
- ・長野県がウェルビーイングの実現を掲げているというところは私も賛同するところ。究極的にウェルビーイングは与えることだと思っている。また同時にその幸せを自分一人だけの幸せということではなく、その幸せを分かち合える社会・学校・地域というのが自分にとってウェルビーイングを実現した状態。そういった意味で、このコミュニティスクールも、これまで5回の議論の中を通して言うならば、学校の中で先生方だけで行っていた教育というものを社会・地域と分かち合っていく、その幸せを（子ども達を教えるということ）先生方だけが教育者として独り占めしないで、地域の皆さんにも共有をしていく、幸せを分かち合っていく。それは決して負担というネガティブなものではない。与えることができる、与えさせていただけるといえるのは地域人としてはとても嬉しいこと。そのような社会がこれから長野県の中でできていけばいい。
- ・検討会内での議論において、コミュニティスクールは大事だと思っている人間ですら様々な違いがたくさんあった。この違いは目を瞑るのではなく、むしろ活かす、楽しむという方向で、私達は少なくともこの場では繋がれたという実感がある。これが学校の学校運営協議会であるとか、運営委員会の中で熟議として展開されれば、違いを活かした形で地域と学校はもっと楽しみながら、内発性に基づいて、面白いことができるのかなというのが我々の議論で示せたと思う。違いを活かしながら自分の頭で考えて、違いを楽しんで繋がっていく。我々がこのコミュニティスクール検討会で見せられた姿勢そのものが、これからのコミュニティスクールを進めていく上で大事な私達の答えになると感じた。